様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ４ 月 ２０ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７００９０

研究課題名（和文）《ベルリン精神》の内的相剋としてのシュライアーマッハーとヘーゲルについての研究

研究課題名（英文）A Study on Internal Antagonism between Schleiermacher and Hegel within the Common "Berlin Spirit"

研究代表者
安酸　敏眞（YASUKATA, TOSHIMASA）

北海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：４０１８３１１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、シュライアマハーとヘーゲルの思想対立を、≪ベルリン精神≫という共通精神の内的葛藤として捉え、宗教・歴史・生・理解に関する彼らの相異なる捉え方を、両者の伝記的事実にまで遡って解明しようとした。二人の思想家は、イデアリスムスの形而上学的精神を共有しているが、彼らの間には①根本的気質の相違、②キリスト教理解の相違、③教派の相違、④政治信条の相違、⑤偶然的要素に起因する確執がある。しかし両者の根本対立は、神学と哲学の相違を止揚して「和解」させようとする哲学者のヘーゲルに対して、神学と哲学の相違を認めつつ、その間に「永遠の契約」を樹立しようとする神学者のシュライアマハーの対立である。

研究成果の概要（英文）：This study sought to clarify the oppositions between Schleiermacher and Hegel as an internal antagonism within the "Berlin Spirit" they both share. For this purpose, it analyzed their conflicting views on religion, history, life, and understanding by tracing back to their biographical data. Despite their common metaphysical spirit, there are many contradictions: 1) the difference of their basic temperament and disposition, 2) their divergent understandings of Christianity, 3) their denominational difference, 4) their opposing political positions, and 5) other antagonisms caused by accidental factors. However, the fundamental difference can best be epitomized as follows: Hegel the philosopher seeks to annul the opposition between theology (Christian faith) and philosophy (scientific inquiry) and bring all contradictions into "reconciliation," while Schleiermacher the theologian distinguishes theology and philosophy and tries to establish "an eternal covenant" between them.

研究分野：キリスト教学

キーワード：シュライアマハー　ヘーゲル　キリスト教　ベルリン精神　絶対依存感情　信仰論　敬虔　弁証法

１．研究開始当初の背景

（１）本研究は、平成 24 年度科学研究費補助金（「研究成果公開促進費」）の交付を受けて刊行された拙著『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学』（知泉書館、2012 年）を直接の母胎としている。そこにおいて筆者は、シュライアマハーからベーク、ドロイゼンを経てディルタイへと至る「解釈学」（Hermeneutik）の系譜と、トレルチからディルタイ、ドロイゼンを通ってベークへと遡る「歴史主義」（Historismus）の系譜とが、意義深い仕方で輻湊していることを明らかにした。これによって筆者に萌した疑問は、ハイデッガーとガダマーによって打ち立てられた現代の解釈学的哲学あるいは哲学的解釈学は、きわめて一面的な偏向性を有しているのではないか、ということであった。

（２）というのは、『真理と方法』の著者であるガダマーは、シュライアマハーからディルタイへと至る解釈学の流れに「ロマン主義解釈学」のレッテルを貼って全面否定し、それに代えてヘーゲルが『精神現象学』のなかで提示した「もうひとつの可能性」を高く評価しつつ、ハイデッガーに従って哲学的解釈学を樹立しようと努めたからである。彼によれば、「ディルタイやトレルチをハラハラさせた歴史的相対主義の問題性も、ハイデッガーにおいて思想の力によって歴史主義が正真正銘克服されるのを体験した人にとっては、脅威となるものを一つももっていなかった」。この述懐が示唆しているように、「乏しき時代の思索者」に心酔したガダマーは、師による「歴史主義の解体作業」と、彼が打ち出した現存在の「歴史性」（Geschichtlichkeit）の概念に、満腔の賛意を表明している。

（３）しかし歴史主義の問題は、ガダマーが言うように、ハイデッガーによって真に克服されたであろうか。否、歴史主義の問題に関する限り、ハイデッガーは存在史的研究と存在分析の作業を通じて、議論の矛先を巧みにすり替えたに過ぎない、と言わざるを得ない。実際、歴史主義の問題はディルタイとトレルチ以降も未解決のまま続き、今日ふたたび再熱している。20 世紀後半および 21 世紀の思想状況は、こうした判断を裏書きしている。

（４）管見によれば、晩年のディルタイが逢着した「歴史主義のアポリア」を脱却する方途としては、二つの対蹠的な可能性がある。一つはトレルチが選び取った「歴史主義の内在的超越」の道である。それは「歴史によって歴史を克服する」（Geschichte durch Geschicht überwinden）という言葉が暗示するように、歴史主義に徹することによってそれを克服するやり方である。もう一つの可能性は、ハイデッガーの『存在と時間』がその綱領を示した「解釈学的哲学」の道である。彼の弟子のガダマーの解釈学は、その卓越した範例を示している。

（５）かくして、歴史主義と解釈学についての系譜学的な考察から、ディルタイ、トレルチ、ハイデッガーの相互関係についての思想史的研究が、緊急の重要課題として筆者の意識に立ち現れてきた。しかしこの課題を真にその深みにおいて究明するためには、いきなりディルタイから始めるのではなく、むしろ彼の後景に聳えている二大巨匠、シュライアマハーとヘーゲルにまで押し戻して、その根源から考察する必要があると考えた。なぜなら、シュライアマハーからベーク、ドロイゼン、ディルタイを経て、トレルチに至る系譜に通底する《ベルリン精神》には、哲学者のヘーゲルが複雑に絡んでおり、ベーク以降の四人の思想家たちは、ヘーゲルをそれぞれ独自の仕方で受容しているからである。それゆえ、ディルタイ＝トレルチ的方向と、ハイデッガー＝ガダマー的方向に二極分化している、歴史主義と解釈学の問題は、畢竟、シュライアマハーとヘーゲルの思想対立に淵源しているように思われる。

（６）ベルリン大学におけるシュライアマハーとヘーゲルの確執は、非常に有名であるが、実際、前者の『信仰論』と後者の『宗教哲学講義』を十全な仕方で解釈するためには、両者の確執の背後にある思想対立の解明が不可欠である。筆者は一連の思想史研究を通じて、シュライアマハーとヘーゲルの不倶戴天の敵対関係を、単なる気質や偶発的事情に由来する問題として片付けるのではなく、《ベルリン精神》に本質的に内在する緊張関係、つまりその内的相剋として解明すべきだ、との直観を与えられた。というのは、表面的な明白な対立にもかかわらず、根底においては両者の間に共通精神が働いていることは、疑い得ないところだからである。それゆえ、もしシュライアマハーとヘーゲルの間の緊張・対立を内包する《ベルリン精神》が、絶対矛盾的自己同一のごとくに作用して、ディルタイやトレルチにまで深く影響を及ぼしているとすれば、まずこれを解明することが先決問題であろうと考えた。以上が本研究に取り組むに至った当初の背景である。

２．研究の目的

（１）本研究は、「歴史主義」と「解釈学」の地下水脈的な思想連関を解明するために、二つの系譜の出発点に位置するシュライアマハーとヘーゲルという、草創期のベルリン大学を代表する二大巨匠に照準を合わせ、宗教（キリスト教）や歴史に関する彼らの思想を比較することによって、深刻な対立を孕みつつ、しかもなお共通性を湛える《ベルリン精神》（Berliner Geist）の実相を、独自の神学的＝宗教哲学的視点から解明することを目的としていた。

（2）換言すれば、ディルタイやトレルチだけでなくガダマーにまで影響を及ぼしているシュライアマハーとヘーゲルの思想対立を、単に表層的なレベルでの確執や相剋として捉えるのではなく、その対立を《ベルリン精神》の内的相剋として捉え、それを宗教・歴史・生・理解のアスペクトのもとに解析することを通して、両雄に通底する《ベルリン精神》そのものの思想的特質と、この対立が孕む思想的ポテンシャルの射程とを、両者の原典テクストから解き明かすことを意図したのである。

３．研究の方法

（1）研究方法としては、筆者がこれまでのトレルチ研究やレッシング研究でその有効性を実証してきた、原典テクストの精確な読解・解析を基本とした。シュライアマハーに関しては、主著の『キリスト教信仰』の序論部分の翻訳・読解を試みるとともに、作者の意図を読み解く上できわめて重要な小著『『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』の翻訳・読解を通して、彼のキリスト教理解の核心を剔抉すべく努力した。ヘーゲルに関しては、『宗教哲学講義』全三巻と『歴史哲学講義』を資料として、彼のキリスト教理解と歴史哲学の特質を解明すべく務めた。

（2）しかし思想史研究の要点は、思想家のテクストとそれが成立した歴史的コンテクストとを、過去と現在の両方の視点から創造的に相関させて解釈することであるので、単にシュライアマハーとヘーゲルの著作の読解・解析だけでなく、彼らが生きた歴史的・時代的状況にも応分の配慮を払った。そこで歴史的ないし伝記的事項を確認するために、現地での実地調査や資料収集を試みた。ベルリン、ハレ、イェーナ、ドレスデン、シュトゥットガルトなどには、彼らに直接・間接に関係する記念碑や資料があり、そういうものに触れることで、テクスト理解が深められた。

（3）シュライアマハーとヘーゲルはともにプロテスタントの信仰をもっていたが（シュライアマハーは改革派、ヘーゲルはルター派）、彼らが生きた時代はプロテスタント国家のプロイセンとカトリック国家のオーストリアの政治的対立が激化した時代でもあったので、「ベルリン精神」を「ウィーン精神」との対比で考察することの必要性も感じられた。そこでこの方面からの考察も試みたが、十分な解明には至らなかった。

４．研究成果

（1）シュライアマハーとヘーゲルの思想対立は、大きく五つくらいの要因に起因している。第一に、北ドイツ（現在のポーランド）出身のシュライアマハーに対して、南ドイツのシュヴァーベン人のヘーゲルという、根本的気質の相違が挙げられる。つまり二人は「完全に対蹠的な人物」（カール・ローゼンクランツ）であった。第二に、神学者のシュライアマハーは「敬虔」（Frömmigkeit）をキリスト教信仰の中心に据え、その本質を「絶対依存の感情」（das schlechthinnige Abhängigkeitsgefühl）と見なすのに対して、哲学者のヘーゲルは、宗教における省察は信仰の形式から理性の形式へ、表象から「概念」（Begriff）へと高まるべきだと主張する。第三に、同じプロテスタントであっても、シュライアマハーは改革派の信仰に掉さし、ヘーゲルはルター派の信仰を固持している。第四に、政治信条の相違ということがある。シュライアマハーはリベラルで共和主義的信条の持ち主であったが、ヘーゲルはより保守反動的な絶対主義者であった。第五に、偶然的要素が複雑に絡んでいる。デ・ヴェッテ解職をめぐる対立や、プロイセン王立科学アカデミー入会をめぐる確執などがそれである。

（2）しかしこうした表面的な相違・対立にもかかわらず、シュライアマハーとヘーゲルとの間には、ドイツ・イデアリスムスに由来する共通の形而上学的信仰が横たわっている。一方で哲学者のヘーゲルが「精神の神学者」（Theologian of the Spirit）と見なされる側面をもち、他方でヘーゲルや彼の影響を受けた「思弁神学」（die speculative Theologie）に距離を置くシュライアマハーが、論敵からその「思弁的傾向」を指摘されるのは、二人の曰く言い難い親近性を示唆している。両者の「遠くて近い関係」が問題となる所以である。

（3）キリスト教信仰と学問研究をめぐるシュライアマハーとヘーゲルの相違は、「永遠の契約」か、それとも「和解」か、という二者択一である。ヘーゲルは神学と哲学を「和解」（Versöhnung）のモティーフで捉え、神学と哲学の相違・対立は哲学のうちで概念的に止揚されて、和解へともたらされなければならない、と考えた。これに対してシュライアマハーの場合には、神学と哲学、キリスト教信仰と学問研究の相違・対立は、どこまでも解消されないものとして残る。だからこそ彼は、両者の間にあの「永遠の契約」（ein ewiger Vertrag）を樹立しようとしたのである。

以上が、本研究によって得られた成果の概要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 安酸敏眞、「永遠の契約」か、それとも「和解」か？—キリスト教信仰と学問研究を

めぐるシュライアマハーとヘーゲルの対立、北海学園大学人文論集、査読無、58号、2015年、29-52

〔学会発表〕（計１件）

① 安酸敏眞、「永遠の契約」か、それとも「和解」か？—キリスト教信仰と学問研究をめぐるシュライアマハーとヘーゲルの対立、2014年12月13日、京都大学基督教学会、京都大学

〔図書〕（計2件）

① 安酸敏眞、『『キリスト教信仰』の弁証—『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』、私家本（研究成果報告書）、2015年、総228頁

② 安酸敏眞、『『キリスト教信仰』の弁証—『信仰論』に関するリュッケ宛ての二通の書簡』、知泉書館、2015年、総228頁

６．研究組織

(1)研究代表者

安酸　敏眞（YASUKATA TOSHIMASA）
北海学園大学・人文学部・教授
研究者番号：40183115